

第17回労働大学総会 問題提起 ——階級的労働運動をめざして——

2021年4月25日
労働大学副学長 宮坂 要

坂牛哲郎学長の逝去を悼む

2003年に労働大学再建にあたり、実践と理論を指導され、その後の労働大学の発展に全精力を傾けていただいた、坂牛学長が2021年3月12日にご逝去されました。つつしんでお悔やみ申し上げますとともに、生前から、ご支援とご協力いただいた皆様にご逝去のご報告をいたします。

1. 今日の情勢

この一年は大変な年になりました。世界を揺るがす新型コロナウイルス感染症の蔓延は収まるところを知らず、昨年1月から1年以上国民生活を苦しめています。二度目の緊急事態宣言解除後の4月になって変異株もあり、第4波の感染拡大に見舞われています。

このコロナ禍の中で安倍政権から菅政権に代わり、その政権運営はコロナ対策の後手後手感や、長男の接待問題など不祥事が相次ぎ、政権支持率は発足時の65%から急落し30%台となって国民の支持を失いつつあります。

このような中、労働者の状態はどうかというと、サービス業、非正規雇用労働者の失業・雇止め、雇用不安と在宅勤務による過密労働へと迫いやられています。

労働組合や政治運動、市民運動は、集会や交流が規制され十分な交流ができず運動の停滞が懸念されます。私たち友の会運動においてもこの一年多くの活動が中止となり、本日の労大総会もズームミーティングによるリモート総会とならざるを得ません。

この困難を乗り越えるために全国の仲間の団結力と英知を結集して活路を切り開いていきましょう。

2. 『まなぶ』を使って学習会

私は国労甲府支部青年部長の時に、60年安保闘争を経験し、私もちょうど非番公休の度に国会前デモ行進に参加しました。この経験によって大衆闘争の大切さを学ぶことができました。

この安保闘争と同時に三池闘争の現地に行きました。この三池闘争でまなんだことは本当に大きかったと思います。この60年安保闘争と三池闘争が私の労働運動の出発点だと言って過言ではないと思います。

そんな青年部運動の中で、労働大学で1960年の安保闘争の前後に『まなぶ』の月刊誌が初めて発行されたんですが、その『まなぶ』を使っての交流と学習会を甲府でやろうとなりました。国労だけでなく郵政の貯金局が婦人部の活動が盛んで、また、国鉄の構内には日通の職場もありましたから日通の青年婦人部のみなさんを中心にですね、青年婦人部の学習会を『まなぶ』の発刊を契機に毎週行われました。ここで本当に学習の大切さというものを知ることができました。

3. 国鉄甲府闘争～家計簿は泣いている

そんな青年部運動を足掛かりにしまして、甲府支部の書記長、委員長をやらせていただき、当時の国鉄甲府闘争をたたかいました。この甲府闘争で特徴的なのは「家計簿は泣いている」です。これは三池の主婦会の闘いに学んで、国労も家族と一緒に闘う必要があるということで家族会がつく

られ、賃金闘争していく場合も家計簿をちゃんとつけて、自分の生活の実態をお互いにつかんだうえで要求を出していくということで、家計簿づくりを始めました。この闘いはあちこちからいい評価をいただきました。

4. 反「マル生」闘争と国労反合研

そんな闘いを進めていく中で、ついに出てきたのが70年マル生闘争。マル生というのは生産性向上運動の略称なんです。このマル生運動で国労から脱退させる。「お前生産性上げなきゃ国鉄に居られない。生産性上げるためには組合運動なんかやってちゃだめだ」「国労から抜けろ」という、駅長や助役という職制が国労からの脱退を強要したんですね。それで、函館全国大会で中川委員長が「座して死を待つより、立って反撃に転じよう。」という有名な言葉によって、不当労働行為を全国的に摘発する運動が進んでいきました。ついに国会でも政府を追及して、結局当時の磯崎国鉄総裁が国会で誤ったという状況まで追い込んでいきました。

国労反合研運動に実は向坂逸郎さんも毎月泊まり込みで参加してくれました。また、三池労組出身の灰原さんは最後まで付き合う。深夜2時3時まで付き合う。この交流がよかった。この国労反合研の運動が全国に広がり、反マル生闘争が前進し、本当に国労らしい運動になる大きな力になったと思います。今もこのような学習と交流の運動が労働組合を強くし前進させるために非常に重要だと思います。

5. 国鉄闘争をたたかい

ところが国鉄労働組合を目の敵にして攻撃してきたのが、中曽根です。この中曽根が総理大臣になりまして、国労を叩けと。「国労をつぶせば総評はつぶれる。総評がつぶれば社会党がつぶれる」と言って攻撃してきました。「臨調行革」で国鉄再建監理委員会がつくられ、国鉄を分割民営化法案が出されます。清算事業団へ入れられた人たちは8000名に上りました。最後まで再就職せず首を斬られた人は1047人。国労はこの1047人の犠牲者をどうやって守るか、私はそのころ国労本部の書記長になっていましたから、この清算事業団で首を斬られた組合員をはじめとする国鉄分割民営化でひどい目に遭った人たちを、何としても救済しようという取り組みを皆さんの応援をいただいてやってまいりました。最終的には中労委のあっせんもあって一定の条件でこの国鉄闘争が終結をしましたが、まだまだいろいろな問題点を残しながら今日まで来ているという状況です。

6. 階級的労働運動の再生をめざして

さて、この国鉄闘争をたたかって思うことは、やっぱり労働運動を本当に労働者の身になって労働者を救う、そういう労働運動にしなければだめだと思つづくと思います。じゃあ、労働者を救うために労働組合はどういう風に強化していくか、それは階級的な労働運動の強化をしていくしかない。そのためには、労働大学のまなぶ運動、三池闘争に学んで今まで非常に前進してきている労大まなぶ友の会運動が非常に重要だという風に思います。

そして、労働大学まなぶ友の会運動を基礎にしたそれぞれの職場闘争を再生させて、一つ一つ権利闘争を前進させる。そういう職場からの地域からの労働運動の前進が、労働者の一つひとつの問題を解決していく近道になっていくんじゃないかなという風に思います。

私自身も三池闘争に学び、労大まなぶ友の会運動で労働者意識を身につけさせていただきました。私は、昭和8年生まれですから年も取っていますが、まなぶ友の会運動を軸に一生労働運動の前進のために頑張り抜いていきたいと思っています。皆さんと一緒に頑張りていきたいと思っています。

ありがとうございました。